

報告

大学選択時の親子関係に関する日中比較研究の展望

Review of Japan-China Comparative Study on Parent-Child Relationships during College Selection

郭 伊晗¹

Yihan Guo¹

¹東北大学

¹Tohoku University

日本と中国は、現在、ともに大学進学率が高くなっている。大学選択は人生を決める重要な場面であるため、その決定にはただ受験生自身の意思だけではなく、親子関係も影響する。大学選択時の親子関係は大学選択に影響すると同時に、青少年の心理的発達にも影響を与えると考えられる。本稿では、先行研究に基づき、青年期における心理的発達、親子関係の発達、大学選択時の親子関係の分類、親子関係が大学選択に与える影響という四つの方面から大学選択時の親子関係について日本と中国を比較する視点を見出す。青年期における子どもは親に対する独立心と依頼心が両方あり、親子間に葛藤が起りやすい。中国の青年は日本の青年より独立性が高く、日本と中国の青年の親子関係には異なる側面もあると考えられる。日本と中国の研究は互いに異なる視点から大学選択時の親子関係のあり方を分類している、家庭の社会経済地位、親子間相互作用、親子間コミュニケーション、親の教育方針という側面から親子関係が進路選択に与える影響に考察した研究が見られる。

キーワード: 大学選択, 親子関係, 日中比較, 青年期

Correspondence concerning this article should be sent to: Yihan Guo, Graduate School of Education, Tohoku University, 27-1 kawauchi, Aoba-ku, Sendai, Miyagi, Japan 980-8576. E-mail: guo.yihan.s7@dc.tohoku.ac.jp

1. はじめに

日本の高等教育は大学進学率の50%を超えたユニバーサル段階に入って久しい、中国の高等教育も大衆化の段階から普及化の段階に移行している(張, 2019)。高等教育を受けられる青年の生徒が増えている一方、多くの高校生が単に大学に行けば満足だというわけではなく、高等教育の質や高等教育を通じて得られる機会を評価し、慎重に選択している。理想の大学に入って理想の専攻を学ぼうと考えるならば、学習成績を上げるために努力するだけでなく、合理的な方法で大学を選択しなければならない(肖, 2006)。

しかし、日本においては、入学する大学に対して不本意感を持つ学生が多く存在していることが示唆されている(竹内・定金, 2019)。一方、中国でも、大学選択への不満を持ち、何に向かって努力すればよいのかをわからず、勉強意欲と自信が徐々になくなった事例や、大学の途中で一時的に専攻を変更した事例も数多く見られる(冯, 2013)。

大学選択は、受験生本人の要因で完結するわけではない。受験生自身の能力以外に、家庭の社会経済地位、両親の教育方針、大学のイメージ、社会の価値観などの因子が関連し、特定の時代の特徴も反映される(趙・傅, 1998)。大学選択に関与する数多くの要因の中で、親子関係は一つの重要な要素であると考えられる。何故ならば、青年期にある高校生は、大学選択という人生に関わる大事なチャレンジに直面するときまでには、アイデンティティが十分に確立しておらず、経済的、精神的に両親に依存し、親のアドバイスを受けた心理状態にある反面、自立欲求も高まり、親子間葛藤が起きる可能性が高い(白濱・江頭・五位塚・古賀, 2017)。大学選択時の親子関係は生徒の青年期の心理的な発達に影響を与える同時に、大学選択行動にも重要な影響を及ぼすと考えられる。

そこで、本稿では、先行研究に基づいて日本と中国を比較する視点から大学選択時の親子関係について検討することを目的とする。具体的に言えば、「青年期の心理的発達」、「青年期の親子関係の発達」、「大学選択時の親子関係の分類」、「親子関係が大学選択に与える影響」という四つの分野に関して、日本と中国においてどのような研究が見られるのか、日中を比較した研究においてはどのような知見が得られているのか、といった諸点について明らかにしたい。

2. 青年期の発達と親子関係

2.1. 青年期の心理的発達の特徴

青年期は身体の発達と生理的成熟とともに、青年の心理的発達にも多くの変化がある。認知的発達と社会性の発達から整理すると、認知について、青年期は個人の知力の全盛期であり、思考力が飛躍的に向上する。知識の習得だけでなく、倫理的に応用することもできるようになる。さらに、創造性も徐々に発達する(王, 2010)。

社会性の発達については、アイデンティティの発達に特徴がある。アイデンティティはエリクソン(E. H. Erikson, 1902-1994)によって提唱された概念である。日本では、エリクソンの理論は古くから紹介されている。最近では、杉村(2001)が「青年が自身の欲求のみではなく他者の意見・期待を考え、他者と相談し、アイデンティティを形成すること」と述べている。畑野・杉村・中間・溝上・都築(2014)は「アイデンティティとは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの両方の事実の自覚である。」と述べている。「斉一性」と「連続性」に注目する研究が増えている。

中国では、1980年代から紹介されている。日本と同様にエリクソンによるアイデンティティの発達段階論への解説に関する文献が数多い。孫(1984)は青年期におけるアイデンティティの混乱に対する解決すべき七つの危機を説明している。それらの危機は時間の混乱感、漠然、否定的アイデンティティ、勤勉さの拡散、性別の混乱、権威への混乱、価値観の混乱である。最近では、王(2010)が「青年が自分自身に対する探索に注意を払い、生活の経験や他者の評価に照らしてアイデンティティを常に見直していくこと」と述べている。日本と中国におけるエリクソンのアイデンティティの理論に関する研究はともに青年期におけるアイデンティティ形成の困難さと大切さ、さらに形成過程における他者の重要性を強調している。

社会性、すなわち、対人関係の発達について、王(2008)は「年齢を重ねるにつれて、青年はますます独立を望むようになるが、他人との関係の質を上げることも要求している。」と述べている。しかし、青年期は身体と心の発達や成熟につれて、それまで一貫した安定性を保って発展してきた心身が不安定に陥りやすい。身体にも心理に

も社会性にも様々な障害が生じてくる。自我同一性の確立の困難、親との葛藤、友人関係の葛藤、自我発達上の危機状態などがある(王, 2008)。

青年期には認知と社会性が急速に発展するが、様々な危機状態に陥りやすい時期であると考えられる。アイデンティティの形成には他人の評価が不可欠である。青年には独立欲求がある一方で、他人との親密的関係性も望んでいる。そのため、青年の最も親近な関係とする親子関係は、考慮すべき重要な事項である。

2.2. 青年期の親子関係の特徴

親子関係は遺伝学の用語では、親と子どもの間の生物学的な血縁関係を指すために使用されている。心理学では、親子の相互関係を指す(叶・白, 2002)。これまで、親子関係における親の教育方針、家庭の社会経済的地位、父母の学歴や職業、父母の親子関係に対する認識、親子間コミュニケーション、家族のパターンなどの要素に関する研究がより多く行われている。以下、青年期の親子関係の発達について考察した関連研究を紹介する。

子どもの成長とともに、親子関係のあり方も変わっていく(王, 2008)。日本では、高・木藤(2008)が「青年期における親子関係の変化は、青年の独立心・依存心と関連が深い」と述べている。白濱・榊原・古川・古賀(2019)によると、青年期は児童期と成人期の間に位置し、青年の自立欲求が高まる一方、親に対する依存欲求も存在し、また経済的にも精神的にも親に依存しなければならない状況にあることから、親に対する葛藤が高まることと考えられる。中国では、俞(2003)が「青年の社会性の発達が家庭に対しても大事であり、その過程において親子衝突の発生が必然的である。身体・心理・社会的要素の相互作用によって親子間葛藤を分析し、青年期の親子間衝突が子どもの認知発展や社会化発展に良い影響を与えられる」と述べている。段(2007)は「青年期には子どもの批判の意識が高くなり、親との関係を改めて認識し、親に対する期待も変わる。かつ、青年は独立心があるため、親と対等な立場になりたい、親に理解させたいが、親と相談したくない」と述べている。つまり、青年期には子どもの親からの独立を巡って親子間に葛藤が生じる可能性が高くなると考えられる。客観的に親子間の葛藤を認識し、研究することが大切だと思われる。

青年期の親子関係の発達の順序については、他にも様々な研究がある。Blos(1971)によれば、まずは親からの分離(距離を取り、反抗する)で、次に分離が進みながら親を客観的に見られるようになり、最後に親と対

話でき、和解する、といった経過をたどる。小高(2000)は、青年期前期では親との意見や価値観のずれから子どもが親に反抗し葛藤が生じやすいが、青年期後期になると親との葛藤が緩和され、親との関係が再構築される、と論じている。片岡・園田(2010)も、青年期中期の子どもは親から分離し、後期は親を再び愛着対象とする可能性がある、と述べている。そのように、青年期は親子関係が分離から仲直りまでの複雑な過程の途上にあることが推察される。

2.3. 青年期の発達と親子関係に関する日中比較研究

青年期の心理的発達の特徴と親子関係に関する日中比較研究、特に、高校生を対象にする調査は数少ない。

張(1991)は、質問紙調査による中国の大学生と日本の大学生の心理的特徴と心理的発達について比較研究を行った。結果としては、中国の青年は日本の青年と比べ、「自尊心」、「独立性」、「他者への信頼感」という指標の得点が有意的に高かった。日本の青年は中国の青年より「従順・依存」の得点が高く、中国の青年は日本の青年も「他者と対立する態度」の得点が低いことが明らかになった。

高・木藤(2008)は中国と日本の大学生を対象として質問紙調査を行い、「独立意識」と「親子関係」を比較し、両国の文化的背景と社会的背景を考察した。その結果、全体的に、自身と将来の生き方や自己判断について、中国の大学生の得点は日本の大学生の得点より有意に高いことを示した。中国の大学生は日本の大学生より高い自信や自負を持っていることが示唆された。親子関係について、母子関係と父子関係に分けて検討した。結果、中国の母親は日本の母親よりも青年期の子どもを信頼し、子どもの考えを尊重するが、子どもを危険から守る意識と子どもの活動を干渉する傾向が強かった。一方、日本の母親はあまり子どもの活動を制限しないが、完全には手放さないことを示した。父子関係については、両国の父親が母親よりも子どもの能力を承認し、信頼できると評価する傾向がある、とされた。日本と中国の家庭内環境はかなり異なっている、と述べている。

二つの比較研究から、中国と日本の青年の親子関係には異なる側面があり、中国の青年は日本の青年と比べて独立志向が高いことが示唆されている。

3. 大学選択時の親子関係

杉村(2001)は青年期における進路選択という課題が

青年の独立志向だけでなく、親などの重要な他人から自分に向けられる期待にも関わる、と述べている。一方、自立を目指す青年と青年の進路を懸念する親との間で葛藤が起こることも予想される。青年期は進路選択において親子間葛藤が生起する可能性が高い（白濱・榊原・古川・古賀, 2019）。現在の「大学全入」と言われる段階にあっても、大学の選択と場面は普遍的で重要であると思われる。したがって、大学選択時の親子関係については、特に焦点化して検討する必要があると考えられる。

3.1. 大学選択時の親子関係の分類

大学選択や高校選択などの進路選択時の親子関係に関する先行研究については、研究者によって親子関係のあり方の分類が異なっている。

張（2011）は大学選択における親子関係を四つのタイプに分類した。一つ目は両親が全部やってくれるタイプである。親が完全に進路選択を主導しており、子どもは勉強して受験すれば良い。二つ目は全部子どもが自分で選択するタイプである。このような意見を持つ親は少数派であるが、彼らは子どもが成長し自分の道を選択する能力と権利を持っている、と考えている。この家庭において親の考えは子どもにとって最終的判断のための参考意見に過ぎない。三つ目は他人に依頼すぎるタイプである。親と子どもの双方が高校教員や他の専門家や親戚などの意見に依存すぎる。最後は理知的なタイプである。親は情報を集め、子どもと相談しながら選択をし、共通的目标に達する。これが理想的大学選択時の親子関係である、と述べている。

白濱・江頭・五位塚・古賀（2017）は、進路選択場面における親の態度について大学生を対象にして質問紙調査を行った結果に基づいて、大学選択における親子の関係を三種類に分類した。一つ目は「主張的態度」で、自分の意見を主張したり、青年の意見に反論したりする親の態度である。次は「共感的態度」で、青年の意見に理解を示したり、応援したりする親の態度である。最後は「回避的態度」で、青年の意見に対して「よくわからない」「いいんじゃない」と言い、議論を深めないようにしようとする親の態度である。

高橋（2006）は進路選択における親子間相互作用を「自律性と関係性」、「独自性と結合性」という二つの側面から分類した。具体的には、「自律性」と「関係性」のコードディングシステムは、「表出された自律的-関係性」、「自律性の抑制」、「関係性の抑制」三つの因子から成る。「表出された自律的-関係性」は不一致の理由を表現し、

議論し、他者の立場を確認し同意するということである、と述べている。「自律性の抑制」は議論を終わらせ、他者に賛成するように圧力をかけることで、「関係性の抑制」は敵意を直接に表し、他者を邪魔し無視することである。一方、「独自性」は明確な考えを示し、意見を直接に述べ、相手の考えに賛成しない態度である。「結合性」は相手の感情を理解したように見え、相手の期待に合わせてよとする態度である。

これらの先行研究では、様々な異なる視点（進路選択をする方式、親の態度、親子の互いの態度など）から進路選択時の親子関係を分類している。今後、大学選択時の親子関係を研究するには、様々な側面を考慮し、総合的に分類する方向性を目指すべきだと考えられる。

3.2. 親子関係が進路選択に与える影響

中国では、親子関係において、家庭の社会経済地位（SES）、親子間コミュニケーション、親も教育方針という側面と進路選択の関連に関する先行研究が多い。一般的に、親の社会経済的地位（SES）に関する研究は教育社会学の視点からのものである。楊（2019）は調査を通じて家庭の資本が高校生の進路選択に与える影響を検討した。楊は、家庭の「社会資本」とは「両親の職業」、「家柄」、「文化資本」とは「両親の最終学歴」と定義した。その結果、都市と農村の高校生を比較し、家庭の資本の違いに応じて、都市部の生徒は進学先の学校や専攻の選択に合理的かつ積極的な態度で臨むのに対し、農村部の生徒は比較的に慎重で保守的であることを述べている。郜（2020）は質問紙調査とインタビュー調査を用いて、大学入試における家庭のSESが生徒の進路選択に及ぼす影響を研究した。結果として、家庭のSESが生徒の進路選択行動に正の相関を及ぼし、家庭の年収と父親の学歴が生徒の自己認識に強い影響を与えている、とした。親子間コミュニケーションについて、張・張（2008）は質問紙調査を行い、青年の進路選択と親子間コミュニケーションとの関係について検討した。その結果、青年が特定の課題（例えば、大学選択、未来の職業、結婚の問題など）へ努力する程度は、この課題に関する親とのコミュニケーションの頻度と有意な正の相関がある、すなわち、青年は特定の課題について親と交流すればするほど、その課題への関心と努力が高まる、とした。また、親子間コミュニケーションは、青年の大学選択や職業に対する努力への影響が大きいということが示された。親の教育方針に関して、張（2008）は、教育方針として、親が青年期の子どもに期待を伝えることによって、彼ら

の興味、目標、価値観の確立や形成を導くと考えられる、とした。さらに、親が支援やフィードバックを与えると、子どもの状況適応能力に対する自己評価に影響を与える可能性があり、子どもの自省を励ます親は、子どもの主体性、計画や意思決定のスキルを促進することができる、といったことも示唆されるとした。

日本では、親子関係において、親子間相互作用、親子間コミュニケーションという側面と進路選択の関連に関する先行研究がある。高橋（2006）は進路選択における親子間相互作用と青年のアイデンティティの発達との関連を検討した。結果としては、親子が自分の意見を説明することや相手の考えを聞き、話し合いを避けないことが青年のアイデンティティ確立と正の関連があることを示した。高橋（2009）は職業進路選択における親子間コミュニケーションの特徴とアイデンティティとの関連を考察した。その結果、女子青年が母親との話し合いを避けることはアイデンティティ達成と負の相関があり、父親が直接的に意見や立場の違いを明らかにすることより、職業選択において精神的な支えを得ることに意味があるということを示した。コミュニケーションのタイプについては、親が「独自性」と「結合性」の双方を示すタイプが、女子青年のアイデンティティ達成や職業選択への積極的な取り組みの得点が高いとした。

3.3. 大学選択時の親子関係に関する日中比較研究

大学選択時の親子関係に関する日中比較研究は少ない。林・倉元（投稿中）は質問紙調査に基づいて、日本と中国の高校生が大学進学時に親と相談を行う頻度を分析した。そして、その異同について、両国の文化の違いや高校の進路指導体制などの背景要因から考察している。林・倉元によれば、日本と中国の高校生はともに大学進学について父親よりも母親と相談する頻度が高い、とした。また、日本の女子生徒は中国の女子生徒よりも頻繁に母親と相談している。一方、中国の高校1年生と3年生は、ともに日本の1年生と3年生よりも頻繁に父親と相談する傾向が見られた。その原因は両国の親子関係の在り方の違いで説明できる可能性があるとして述べている。中国の3年生は2年生と比べ、父と相談する頻度が高いと示した。原因として、大学進学の費用という経済的要素が考えられている。

4. おわりに

これまで、日本と中国では青年期の心理的発達と青年

期の親子関係の特徴や発達について多くの研究が行われてきた。一方、青年の心理的特徴と発達に関する日中比較研究と青年期の親子関係の日中比較研究もあるが、数が少なく、また、新しい研究でも10数年が経過しており、以下のような現在の状況が反映されていない。

2020年1月から最初に中国で流行した新型コロナウイルス感染症は、これまで日本と中国を含む世界のほとんどの国に影響を与えている。新型コロナウイルスの伝染性の高さにより、中国と日本の政府を含む世界中で、国民の外出制限や学校の授業のオンライン化が推進された。中国では、高校生は高校に併設されている寮に住むのが一般的である。しかし、外出制限が掛かったタイミングは春節（旧正月）の時期であり、高校生はそれぞれ実家に帰省していた。自粛期間には、コロナの脅威とオンライン授業によって、親子とも通常期とは違って敏感で不安な感情を抱くようになっていたはずである。その中で親子が長い時間を一緒に家で過ごすこととなった。このような状況が親子間の関係を変化させ、より一層の葛藤を引き起こした可能性があると考えられる。一方、日本では、寮に住む高校生が稀なので、コロナ禍による自粛が親子関係に与えられる影響は、中国ほどは大きくないと考えられる。したがって、コロナ禍の影響について両国を比較するのは意義があると思われる。

また、大学選択時の親子関係について、両国で行われた先行研究では、それぞれ異なる角度から焦点を当てており、様々な親子関係の要素が進路選択に与える影響を検討してきた。しかし、その中では大学選択に焦点を当てた研究は少なく、さらに、両国の比較研究はほとんど行われていない。

今後、コロナ禍の下で、青年期の親子関係がどのように変化したかという観点は、研究課題の一つと言えよう。かつ、コロナ禍の影響によって変化した可能性がある親子関係が大学選択に与えた影響について、日中比較研究を進めることが求められるだろう。

謝辞

指導教員の倉元直樹教授の添削指導に感謝します。なお、本研究はJSPS 科研費 JP20K20421 の助成を受けた研究成果の一部である。

文献

Blos, P. (1971). On adolescence : A psychoanalytic

- interpretation. NY: Free Press. 野沢英司(訳). (1971). 青年期の精神医学. 東京:誠信書房. (Original Work published 1962).
- 段巧灵(2007). 青春期親子衝突と良好親子关系的建立. 现代教育论丛, 12, 66-70
- 冯伟光(2013). 大学生转专业动机及适应性分析. 高校辅导员, 02, 63-66
- 藤原あやの, 伊藤裕子(2017). 親子の対立・葛藤における青年の反応尺度の作成. カウンセリング研究, 50(1), 32-40.
- 畑野快, 杉村和美, 中間玲子, 溝上慎一, 都築学(2014). エリクソン心理社会的段階目録(第5段階)12項目版の作成. 心理学研究, 85(5), 482-487.
- 郇文凤(2020). 家庭社会经济地位对学生高考志愿选择行为的影响研究. 石河子大学
- 胡妍妍(2020). 重大疫情下叙事疗法在改善中职学生亲子关系中的应用. 职业教育(中旬刊), 19, 58-60
- 岩男尚美, 古賀聡(2019). 対人関係イメージ図を用いたソシオドラマ体験による親との心理的距離の変化青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ. 九州大学心理学研究, 20, 33-41.
- 高天碩, 木藤恒夫(2008). 日中大学生の独立意識と親子関係. 久留米大学心理学研究, 07, 19-28
- 片岡祥, 園田直子(2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ. 久留米大学心理学研究, 9, 1-8.
- 小高恵(2000). 親—青年関係尺度の作成の試み. 南大阪大学紀要, 3(1), 87-96.
- 王怡(2008). 親子関係が青年期の自我発達上の危機へ及ぼす影響—日中比較研究. 北星学園大学大学院社会福祉学研究所北星学園大学大学院論集, 11, 71-91
- 劉楠(2019). 青年期から成人期へ移行する親子関係とIT利用:一越「域」する地方の若者の自立を中心に—. 21世紀東アジア社会学, 10, 28-39
- 林如玉, 倉元直樹(投稿中). 大学進学における相談相手の役割に関する日中比較研究. 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要第7号
- 孙名之(1984). 埃里克森的自我同一性述評. 湖南师院学报(哲学社会科学版), 04, 88-93
- 白濱あかね, 江頭愛, 五位塚和也, 古賀聡(2017). 進路選択における親子間コミュニケーションと大学生のアイデンティティ形成および親子関係認知の関連. 九州大学心理学研究, 18, 73-83
- 白濱あかね, 榊原有紀, 古川依里香, 古賀聡(2019). 大学生が回想した進路選択時の親子間葛藤:ロールプレイングによる親子間葛藤の捉え直し. 九州大学総合臨床心理研究, 10, 1-6
- 杉村和美(2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ研究:2年間の変化とその要因. 発達心理学研究, 12(2), 87-98
- 高橋彩(2006). 進路選択における親子間相互作用とアイデンティティとの関連. 日本青年心理学会大会発表論文集, 14(0), 42-43
- 高橋彩(2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連. パーツナリティ研究, 17(2), 208-219
- 竹内正興, 定金浩一(2019). 現代の大学不本意入学者—入学と就学の観点からの検討—. 甲南大学教職教育センター年報・研究報告書, 1-11
- 王静(2010). 浅谈青年期心理发展与心理保健. 中国中医药现代远程教育, 14, 115-116
- 肖蕾(2006). 影响高考志愿填报的因素及探析. 上海教育科研, 11, 31-33
- 杨秀芹(2019). 社会分层的代际传递:家庭资本对高考志愿填报的影响. 中国教育学刊, 06, 24-29
- 叶一舵, 白丽英(2002). 国内外关于亲子关系及其对儿童心理发展影响的研究. 福建师范大学学报, 02, 130-136
- 俞国良, 周雪梅(2003). 青春期親子衝突及其相关因素. 北京师范大学学报(社会科学版), 06, 33-39
- 张日昇(1991). 关于青年期心理特征的中日比较研究. 北京师范大学学报, 01, 25-34
- 赵文波, 傅志刚(1998). 影响高考志愿填报的因素及成因分析. 浙江师大学报, 02, 3-5
- 张玲玲, 张文新(2008). 中晚期青少年的个人规划及其与亲子, 朋友沟通的关系. 心理学报, 05, 583-592
- 张玲玲(2008). 青少年未来取向的发展与家庭, 同伴因的关系. 山东师范大学, 08
- 张渝鸿(2011). 高考志愿引发親子衝突. 北京教育, 02
- 张继明(2019). 构建有质量的普及化高等教育. 高校教育管理, 13(02), 49-56.

(2000年00月00日受付, 2000年00月00日採択)